

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：53203

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13283

研究課題名（和文）英語を英語で効果的に教えるためのティーチャートークの作成と検証に関する研究

研究課題名（英文）Devising teacher talk in English classrooms in Japan to best utilise the target language by teachers

研究代表者

山村 啓人（Yamamura, Hiroto）

富山高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：40734421

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：英語の授業ができるだけコミュニケーション能力の伸長に結実するためには、母語で英語についての知識を増やすばかりではなく、英語そのものが教室内でのコミュニケーションの手段になるような仕方で教師が英語を使用する必要がある。しかしこれまでは、英語の量ばかりが着目され、どのような場面でどのような英語を使えば効果的なのかについてはあまり議論されず、教室での実践も蓄積されていない。この点を克服すべく、本研究では特に英単語を英語で指導する際の方法を提案し、データを収集、検証を行った。教師が工夫をすれば、概ね英語の意味を英語で伝えたり理解度を確認することは可能であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の英語教育では、教師が日本語で英文の説明をする方法が長く広く採用されてきた。近年は、より英語コミュニケーション能力の育成に結びつく英語授業を創造すべく、様々な英語教育改革が推し進められている。そのひとつに、「英語の授業は英語で」という方針があったが、日本人英語教師の英語運用能力の問題や具体的な方法が分からない等、課題が多く、授業中の使用言語について前向きな変化が継続的に起きているとは言い難い。

本研究では、教室で効果的に英語を使用するための具体的な方法を提案し、実際に授業で使用、実証を試みた。その結果、単語によってばらつきはあるものの、概ね提案した方法で意味を伝えることができた。

研究成果の概要（英文）：Traditionally, we have mainly heard Japanese explaining English to students in English classrooms in Japan. To foster students' communicative competence in English, we need to increase the amount of English spoken by teachers as well as by students in order to create a quality-rich English classroom. However, teachers have been struggling to use English effectively in the classroom. In this research project, an effective way of using the target language has been proposed incorporating the idea of eliciting, conveying/illustrating meaning, and checking understanding in English. Empirical data was collected in the actual classroom to see how well the method has been implemented with a group of high school students. As a result, with varying degree of difficulty for some words, well-thought-out teacher talk successfully conveys the meaning of target items in English.

研究分野：英語教育

キーワード：ティーチャートーク 語彙指導 Eliciting Situational presentation Checking understanding

1. 研究開始当初の背景

2009年に告示された高等学校学習指導要領「外国語」で「授業は英語で行うことを基本とする」という内容が示されて以来、高等学校の英語授業において、主に教員の英語使用を増やそうという試みがなされてきたと思われる。しかし、英語使用が増加したとすれば、一時的な流行ではなく、継続的に実施されているのかどうか、また、英語で授業をすること自体の効果などについては不透明な部分が多い。さらに、授業を英語で行うその方法については、授業のどの場面でのようにすればよいのか、研修もほとんどなく、各個人の判断に委ねられている部分が多い。

研究代表者は、2013年にイギリスで国際的な英語指導資格である CELTA を取得し、英語で英語を指導する手法についてトレーニングを受けたことを契機に、2014年から自身の授業で英語の使用を増やし、また実証的なデータ研究を行い学会で発表も行った。本研究は、その実践を発展させ、一般性を高める意図で実施された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、授業を英語で行う際の具体的な提案をし、その方法について実証的なデータを収集し、検証することである。本研究では特に、新出語彙の導入において、インタラクティブ（双方向的に）英語を用いる手法を提案した。その背景は以下のとおりである。

まず実証研究の前提として、英語で行う英語の授業の利点を整理した。授業を英語で行うことの第一義的な意味は、理解可能なインプット（comprehensible input）を増やすことであるが、教師ばかりが一方的に発話することのないよう、学習者からの発話を引き出すことも重要であると考えられる。これを可能にするためには、教員は英語を用いる際、分かりやすく生き生きと英語を用いることに加え、質問も交えながら授業を双方向的な英語コミュニケーションの場にするのが肝心である。この双方向的な英語コミュニケーションのトリガーとなる教師の英語使用を interactive teacher talk と呼び、次のような3つの特徴を特定した。1. 英語で指導したい言語材料を引き出すこと（Eliciting the target items）、2. 質問でその言語材料の理解度を確認すること（Checking understanding by questions）、3. 言語材料の意味を文脈の中で描写すること（Conveying/illustrating meaning）である（Figure1 参照）。

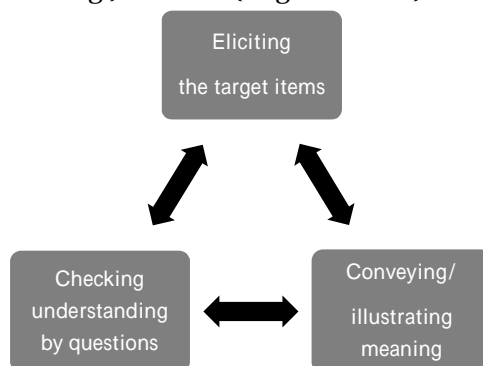


Figure1. *Essential Elements of Interactive Teacher Talk*
Yamamura(2021, 2022)より

またもうひとつの重要な点として、授業を英語で行う際、あいさつや指示などに代表されるような主として定型表現から成る Classroom English の部分だけで英語を用いるのではなく、新出言語材料や新しい概念などを英語で教えることで、真に「英語で英語を理解する」ことにつながる質の高いインプット源になるのではないかということである。これは別の言い方をすれば、教員の英語使用量だけを重視する（How much do teachers talk?）方針から、どのように英語を用いるか（How do teachers talk in English?）への変換であると言える（O’Neil, 1994）。

3. 研究の方法

実際に担当している高等専門学校の授業において、語彙を英語で指導する実践を行った。普段より英語を用いる授業を実践しているが、本研究のために計画的にデータ収集を行った。本研究で提案する手法を用いて語彙を指導した場合、学習者はどの程度意味を把握することができるのかを知るために行われた。

データ収集は2020年と2021年に2度行われた。両方とも研究代表者が当時担当していた富山高等専門学校2年生の総合英語という科目内で行われた。2年生のため、高等学校でも使用する検定済教科書を主たる教材としている授業である。通常の授業通り、語彙の導入部分を英語で行ったのち、Microsoft Form によるオンラインアンケート調査が実施された。指導した単語をすでに知っている学習者がいる可能性が常にあるため、アンケートによって知っていた学習者とそうでなかった学習者を識別した上で、それぞれの結果を集計した。意味が把握できたかど

うかは、日本語訳を提示してもらうことで判断することにした。指導した語彙群は、High School Level English Vocabulary 1800 (Ishikawa, 2015) より選んだ。以下(図2)概要を示すが、それぞれの詳細については、Yamamura(2021)及び Yamamura(2022)にまとめられている。

時期	対象クラス	指導した単語群と期間	指導後の質問項目
2020 年度 春	高等専門 学校 2 年 生 (n=41)	effect, term, benefit, consider, charge, former, survey, budget, victim を 3 つ ずつ 3 回の授業で	(1) Did you know the word “X”? (2) What do you think the word means after learning what you did in this class? (3) How useful do you think the teaching was? (4) Free comments
2021 年度 春	高等専門 学校 2 年 生 (n=43)	appropriate, vehicle, abuse, symptom, vary, rough を 3 つ ずつ 2 回の授業で	(1) Did you know the word “X” already? (2) What do you think appropriate means after the teaching? Answer in Japanese. (3) After the teaching of “X”, how useful do you think the teaching was? (4) Free comments

図2 データ収集の概要

指導前には、各単語を英語で教えるためのティーチャー・トークが準備され、授業中の学習者からの反応に対しては、その場で即興で対応した。一例を挙げると、vehicle という単語に対して、引き出すためには What are the examples of vegetables? What are the examples of animals? Then what are cars, buses, and trucks? というように、具体例とその名称という関係性を利用して英語を用いた。さらに、Cars, buses, trucks are examples of vehicles. A vehicle is a machine with an engine that is used to take you from one place to another. のように説明した。

4. 研究成果

結果としては、指導する単語によって理解度の差が生じた。例えば、2021 年度に実施した分では、それぞれの単語を知らなかった学習者グループのうち、appropriate の意味を正確に把握できたのは約 53%、できなかったのは約 47%であったのに対し、abuse は約 93%が正解し、不正解だったのは 7%であった。rough は約 66%が正解し、約 34%は不正解であった。具体的な動作を示す動詞や物を表し名詞などは英語で意味を描写しやすいのに対し、形容詞は意味を伝え、把握させるのが困難であることが分かった。新出言語材料を目標言語(英語)でうまく指導できるかどうかは、教員が学習者にとって分かりやすい文脈や例を用いて話すことができるかどうかに加え、単語自体の品詞や意味にも依存することが示唆された。

また研究方法上の課題として、今回は日本語で意味を提示してもらったが、言語化できないものの意味は把握できていた学習者もいた可能性は排除できないことや、意味的には近いもののニュアンスの異なる日本語を不正解と判定したことなども研究結果に影響したと考えられる。例えば、rough は「冬に手が荒れる」「悪天候で海が荒れる」などの例を引き合いに出して英語で伝え、「荒れた」などを正解とした一方で、「悪い状況」や「乾燥した」は不正解と判定した。以上の結果の詳細は、各論文にまとめられている。

また 2022 年度には、中高の英語の先生方を対象にワークショップ形式で、本研究で実践、実証した手法について提案を行った。その結果、Classroom English ばかりではなく新出言語材料をインタラクティブでクリエイティブな英語で指導するという提案と手法は概ね好意的に受け止められた。しかし同時に、新出言語を指導する際に目標言語である英語を用いることは、先生方にとってかなりハードルが高いという意見もあった。事前にティーチャー・トークを計画したとしても、授業でスムーズに臨場感をもって英語で進めることや、生徒からの意見に即興の英語でやりとりを継続させるのが難しいということである。これについては、「教師の英語力」を論じる必要があり、本研究で提案したような手法も含め、授業の質を改善していこうとする場合、日本の英語教員には現状以上の高い英語運用能力が求められると思われる。そのための研修や個人での英語運用力のブラッシュアップ、また授業の英語スクリプトをあらかじめ準備しシュミレーションやりハーサルを行うなど、教材研究と授業準備の段階で多くのことを行う必要があると思われる。

5. 参考文献(研究成果以外)

- Ishikawa, S. (2015). A new corpus-based methodology for pedagogical vocabulary selection: Compilation of “HEV1800” for Japanese high school students. *Journal of the Chubu English Language Education Society*, 44, 41-48. doi: https://doi.org/10.20713/celes.44.0_41
- O'Neill, R. (1994). The myths of the silent teacher. Talk given at Annual IATEFL Conference., April 1994, <http://www.tedpower.co.uk/esl0420.html> (accessed 22 April, 2019)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 YAMAMURA Hiroto	4. 巻 51
2. 論文標題 Interactive Use of the Target Language and its Effect on Learners' Understanding of New Words	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Chubu English Language Education Society	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamamura Hiroto	4. 巻 8
2. 論文標題 Examining Communicativeness of Teacher Talk in Conveying Meanings of Vocabulary: Going Beyond Classroom English to Provide Quality Input	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 富山高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 YAMAMURA Hiroto
2. 発表標題 Interactive Use of the Target Language and its Effect on Learners' Understanding of New Words
3. 学会等名 中部地区英語教育学会第50回記念愛知大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YAMAMURA Hiroto
2. 発表標題 より実りある目標言語使用を目指して～単語の指導を中心に～
3. 学会等名 第222回富山英語指導法勉強会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------